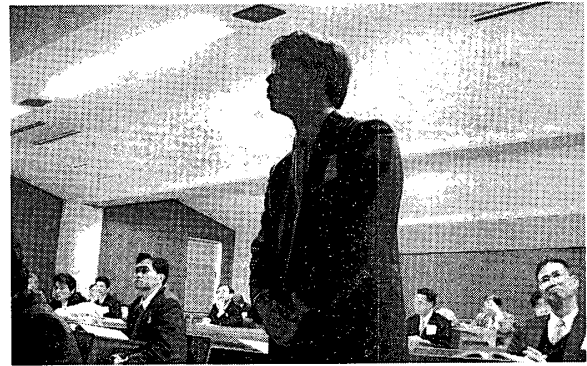


川島幸之助コメンテータ



会場風景

ことに対応する現実を実証・再認識させるものであった。

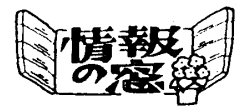
宮下隆氏（コマツ）の「ライン単位の効率的な生産から工場全体最適生産へのアプローチ」は自社工場のひとつを例に、変種変量生産に対応するために、素材加工から組立出荷までを統合した生産物流シミュレーションを試みたものである。シミュレーションデータの積み重ねから全体としてどのように最適化を導入していくか（今泉淳コメンテータ（東洋大））がこれからの課題になっている。

発表全体を通してみると、個々のシステムのみならず企業経営全般において、「分散と統合」が課題とされていることがよくわかる企業事例交流会であったよ

うに思う。1発表30分の時間では、フロアからの質問は1つに限られてしまい、どれも討議に至ることはできなかったが、休憩時間や終了後に、発表者やコメンテータを囲んでの交流がいくつも見られていた。

ORは実践で効果が出てこそ検証ができるのであり、実際のORの適用事例の発表を通して企業と研究者との交流を図るのを目的としている企業事例交流会は、研究者にとっては問題を見出すよい機会となる。また、企業のORワーカーにとっては単に交流のみならず、事例発表から、その道の研究者の具体的提言を得てジャーナル論文に仕上げ、社会人ドクターへのステップにもなる機会と考えられる。どちらにとってもこのような事例交流会への積極的な参加が望まれる。

3大学による「問題発見とモデル化」 プレゼンテーションの試み



吉瀬章子（筑波大学）

東京工業大学経営システム工学科では約20年間、また筑波大学社会工学類経営工学専攻では約15年間、それぞれの3年次の実習において「問題発見とモデル化」の課題を課している。「対象は何でもよいから、各自が興味をもつことに工学的なアプローチを用いて提案を行え」という課題だが、テーマの多様さ、解析方法の独自性、プレゼンテーションの懲り方など、大学内部で留めておくには惜しい内容もあり、平成7年より相互の大学で数名の学生を派遣して、交流発表会を行ってきた。今回その試みの延長として、平成15年OR学会春季発表会実行委員会のご理解を得て、会場近くの教室をお借りして、慶應義塾大学管理工学科

の学生を含む、3大学による発表会を開かせて頂いた。

日時：3月19日 12:30~15:15

発表者（所属）とタイトル：

伊藤晃典（東工大）

「スーパーマーケットへの小口専用レジ導入における効果の検証」

本間裕大（慶應大）

「料金所ETC化による渋滞緩和効果の評価」

大村鐘太（筑波大）

「ゲーム01における最適戦略」

高橋大地（筑波大）

「最強打順はこれで決まり」

千場崇史 (東工大)

「研究室の決定方法について」

佐藤 純 (東工大)

「ファーストフードで健康生活」

二村裕治 (筑波大)

「すしテーム一回転寿司の最適な流し方」

下妻友成 (筑波大)

「これからの農家はもうかるか？」

辻本 亮 (東工大)

「ネット通販会社の店舗販売キャンペーンシフトの最適化」

南保洋介 (筑波大)

「CGIを使ったつくばのバス時刻案内」

司会：森雅夫 (慶應大), 水野眞治, 矢島安敏 (東工大), 山本芳嗣, 吉瀬章子 (筑波大)

数理計画, 待ち行列, シミュレーション, CGI 技法など, 各発表で用いている道具はまちまちだが, いずれも学部3年生が何とか授業で習得した知識が基本となっている。当然学会の研究発表と比べると拙い水準の内容ではあるが, どの発表者も, テーマ選びからアプローチまで自ら設定した自信からか, (単なる怖いもの知らずとも言えるが) OR 巧者からの質問にも堂々と答えていたことは, 引率者のひとりとしても意外だった。特に今回が初めての試みとなった慶應大では, この課題が必修として課されたわけではないにもかかわらず, 本間君1名が果敢に挑戦し, 丁寧な議論運びと迫力ある発表で聴衆を圧倒した。本間君の勇気に拍手を送りたい。東工大と筑波大では例年, 各大学で事前に行う発表会においての, 学生同士による投票で参加者を選んでいる。人気投票であるので, 発表会

でのウケ具合は得票数をかなり左右する。自校ではのびのび発表し得票を勝ち得たものの, 交流会では萎縮して思うように発表できず, 落ち込む学生も見かけられた。彼らとしては不本意な結果であったに違いないが, 他大学との交流会であればこそ得られる貴重な経験のひとつであろうと思う (発表会の様子については http://infoshako.sk.tsukuba.ac.jp/information/Keiko/Home/T_Y_P/StudentsWorkshop2003-3U.html もご覧下さい)。

数名の先生方から, こうした交流会を, 若手 OR 研究者の登竜門とも呼ばれた SSOR の復活に結び付けてはどうかというご意見を頂いた。私自身 SSOR によって多くの先生方, 研究者の方々にお会いできたことを大変に感謝している。その歴史を辿ると, SSOR の起源は大学間を越えた大学院生による勉強会であったと伺っている。こうした小さな交流会から, 初期の SSOR スピリットをもつバイタリティあふれる学生が, 続々と OR の分野に集って下さることを心から願っている。

発表会後も, 実行委員会の打ち上げ会と兼ねた懇親会の席を用意して頂いた。参加学生にとっては, 参加者同士のみならず, 実行委員会の先生方, 会場運営にあたった大学院生の皆さんとお話できる貴重な機会となった。ただでさえお忙しい中, この交流会の開催にあたり多くのご腐心を下さった, 小沢正典先生をはじめとする実行委員会の皆様方, また拙い発表にもかかわらず会場において頂いた多くの OR 学会員の皆様方に, この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

なお, このイベントについてのご関心あるいはご意見がありましたら, 吉瀬章子 (筑波大), 矢島安敏 (東工大), 森雅夫 (慶應大) のいずれかにお問い合わせ下さい。